

2013/12/19

2013年度看護実践開発研究センター
認定看護師「緩和ケア」コース修了式式辞

ごあいさつ

「2013年度認定看護師教育課程〈緩和ケア〉の修了式」に際しまして、山梨県福祉保健部医務課看護指導監市川敏美さま、山梨県総務部私学文書課総括課長補佐掛川浩正さま、山梨県看護協会会長藤巻秀子さま、県立大学同窓会白樹会会長山本美代子さま、その他県内外の医療関係者のご来駕を賜り、ありがたく厚くお礼申し上げます。

早いもので当課程開講式を開いたのは本年6月1日、あれから7か月の月日が経過いたしました。この間、修了生の皆さんは、過去にあまり経験のない実に過酷な体験の日々だったことと思います。それに能く耐えて今日全員が修了できることは大変うれしく、心から敬意と称賛を贈りたいと思います。

ところで・・・；

近代落語を確立した人といえば「三遊亭圓朝」のことです。圓朝は、「文七元結」、「指物師名人長二」、「真景累ヶ淵かさねがふち」、「怪談牡丹灯籠」、「塩原多助一代記」など数えきれないほどの作品が残っていますが、私たち山梨にとっては名作「鰻沢＝正式名・鰻沢雪の夜話」があります。そのあらすじは大変面白いのですが今は時間がありませんから別の機会にお話ししましょう。また、「塩原多助一代記」などは戦前の修身の教科書に掲載されましたから、戦前の教育を受けた人で「塩原多助の蒼の別れ」などのあらすじは、「本所に過ぎたるものが二つあり津軽大名炭屋塩原」のキャッチコピーと共に知らない人は皆無だったのです。

圓朝は、江戸幕末の天保10年（1839）に生まれ明治33年（1900年）に満60歳で生涯を閉じました。その時の辞世は有名な「耳しひて 聞き定

めけり 露の音」というものでした。「露の音」など元来存在しないのですから健全な耳には聴こえるわけのものではありません。それなのに「耳しいて」つまり聴力を失って初めてこれが聴こえると主張するのです。

また、東京台東区にある全生庵の圓朝が眠る墓の墓石には「三遊亭圓朝無舌居士」と山岡鉄舟の筆で書かれています。落語家は舌を使ってしゃべるのが商売です。その落語家の墓碑に舌が無い人という意味の「無舌居士」は実に相応しくありません。この「耳しひて」と「無舌」には何か因縁がありそうです。

山岡鉄舟という人は、勝海舟の意を体して江戸城明け渡しについて、当時駿府にいた西郷隆盛との間で交渉を行って江戸無血開城に成功した人として有名です。圓朝は鉄舟にほれて親分・子分といったような間柄だったようです。その鉄舟は明治になってから近所の子供を集めて幼稚園のようなことをしておりました。そんな時、落語名人の名をほしいままにしていた圓朝に、鉄舟は子供たちの前で「桃太郎」の話をするように命じたそうです。自分を名人と思っている圓朝にしてみればチーチーパッパの子供たちに桃太郎の話とはといささかむっとしたのですがしかたない、親分の命令だということで引き受けました。結果は見事に失敗。子供たちはちっとも名人圓朝の話に耳を傾けてくれませんでした。

これを見ていた鉄舟が「私は子供時代毎晩寝床で母から桃太郎の話を聞いたが一度として面白くないと思ったことが無かった。今思えばそれは母が舌でしゃべらずに心で話してくれたからだと思う。いいか、役者が体を失って初めて名人になるように、噺家も舌を無くして名人になるんだ」と、そう言ったのだそうです。「舌先でしゃべるな」ということだったのでしょう。それから3年圓朝は桃太郎の話を練習し続け、3年後に子供たちを前にもう一度話したところ今度は子供たちが一心不乱に聞いてくれたそうです。本当の名人開眼の瞬間ですね。

こういう話の末が、前述の「無舌居士」という号になったり、「耳しひて聞き定めけり露の音」という辞世になったりしたのでしょうか。物理的な聴覚器官としての耳が聞こえなくなっちはじめて心の聴覚器官が

音の無い音を聴き分けるようになると言いたいのです。

こんな話を今日致しますのは、他でもありません。皆さんが「緩和医療」の現場で相対する患者さんの多くは、末期の状況におかれている方々であろうと思います。そういう人々は、文字通り「耳しひて」いたり、「目しひて」いたり、つまり体中の実に多くの器官が機能不全に陥っているはずで、それでありながらというか、そうであればこそ尚「露の音」を聴き分ける鋭敏な能力をクランケは備えているのかもしれない。

そういう人々に対抗するためには、圓朝の故事に倣って、彼が3年間桃太郎を習い続けたような「舌でしゃべらない」テクニックが必要になることでしょう。皆さんは、この7か月間の基礎の上に来春の資格試験が待ってはいますが、そこを超えてなお「露の音」を聴き分けるまでの技量を身に付けていただきたい。それが地球より重い人の命に応える聖なる仕事の真髄なのだと思うからであります。

最後になりましたが、看護実践開発研究センターの教職員をはじめ認定看護師教育課程に参加いただいた本学内外の全先生方に心から敬意を表し、併せてお祝いの言葉と致します。

ご清聴ありがとうございました。